

論文要旨

博士論文題目 仏教女性観の展開

大阪大谷大学 文学研究科
歴史文化学専攻（後期）

備後 翠

目次

序章

第一章 『テーリーガーター』における比丘尼の出家動機と生き方

第一節 子を亡くした母

第二節 結婚生活の破綻

第三節 低い社会的身分からの出家

第四節 自己主張する娘たち

第五節 誘惑を撥ね除けて

第二章 比丘尼を支えた比丘マハーカッサパ

第一節 『テラガーター』におけるマハーカッサパの頭陀行

第二節 律蔵におけるマハーカッサパの女性観

第三節 女性出家者のよき理解者マハーカッサパ

第四節 妻バツダー・カピラーニーの証言

第三章 パターチャーラー出家因縁譚の交錯と善業から悪業への展開

第一節 パーリ文献におけるパターチャーラー像

第二節 パーリ文献におけるキサーゴータミー像

第三節 パーリ文献におけるウッパラヴァンナー像

第四節 漢文献におけるパターチャーラーの出家因縁譚

第五節 漢文献におけるキサーゴータミーの出家因縁譚

第六節 漢文献におけるウッパラヴァンナーの出家因縁譚

第四章 比丘尼差別の始まり

第一節 初期仏教の女性観

第二節 比丘尼誕生による仏教教団の負担

第三節 八敬法の制定

第五章 抑圧されていく人々

第一節 仏陀の平等観

第二節 説一切有部におけるチャンダーラの出家禁止

第三節 『大品般若波羅蜜経』におけるチャンダーラ差別

第四節 女性出家者へのハラズメント

第六章 五障三従と変成男子

第一節 五障三従思想の発生

第二節 『維摩詰所説経』における初期大乘仏教の女性観

第三節 変成男子説の登場

第七章 鎌倉仏教における女性の解放

第一節 法然の女人往生論

第二節 道元の比丘尼観

第三節 日蓮の女性観

終章

序章

仏教女性観は一貫せず、文献によって開きがある。仏教教団は女性を平等に扱っていたと考えられるものもあれば、差別していたことが明かであるものもある。経・律はほとんど仏陀の言葉として扱われているが、すべてが仏陀の語ったものでないことはあきらかである。仏弟子にはさまざまな境遇の出身者がいた。バラモン・クシャトリア・ヴァイシャ・シュードラ・不可触民・奴隷・老人・強盗・殺人鬼、そして女性であった。仏教教団では身分貧富を問わず出家を望む者は平等に受け入れた。当然女性も受け入れた。最古の仏教文献である『スッタニパータ』が、仏陀在世の教えと仏教教団のあり方に最も近く、ついで古い比丘の偈集『テーラガーター』と比丘尼の偈集『テーリーガーター』が初期仏教の仏弟子の姿に近いと考えられる。これらの文献を初期仏教の出家者のあり方を語ったものとして捉え、これらの内容と相容れないものは、後世創作されたものとして、仏教女性観がどのように展開していったかを探った。『テーリーガーター』に見られる仏教教団の比丘尼像と『マヌ法典』に記される女性のあり方を対比することも古代仏教思想を探る上で必要なことであると捉えた。

仏陀は平等思想を掲げた人であった。社会にヒンズー教的差別思想が浸透すると共に、仏教も女性差別を受け入れるようになった。それに反発して女性救済の動きも現れた。仏教思想が展開せざるをえなかった社会状況にも触れた。時には平等社会をめざし、時には差別的に女性に接した仏教思想の流れを、『テーリーガーター』から始まり、部派仏教、大乘仏教から鎌倉仏教までの仏教女性観の展開を探ることが目的である。

第一章 『テリーガーター』における比丘尼の出家動機と生き方

比丘尼の出家動機で最も多いのが子を亡くした辛さからの出家である。『マヌ法典』では男子を生むことが妻の義務であった。子を亡くした母たちの多さから彼女たちの立場がいかに過酷であったかが推測された。夫を捨てた妻たちが公然と夫を非難する言い分を認め出家させていることから、当時の仏教教団は、平等の感覚で夫婦のあり方を捉えていて、妻は夫に従属して生きる存在ではなく、個人として生きることを認めていたと指摘した。夫に捨てられた比丘尼の偈は彼女たちの回顧録に近いものである。それゆえ俗世の生活での苦悩が伝わった。

物乞いや奴隷の出身者がいることで求める者は社会的身分に関係なく平等に出家を受け入れていたと判断した。また奴隷の身ではあるが、当時の知識階級のバラモンに果敢に論争を挑み、仏教に帰依させた女性のいることから、身分・性別に関係なく意見を述べられる環境が仏教教団にあったと指摘した。父の決める相手に嫁ぐことだけが娘の生きる道である社会意識の中で、自己の意思で出家を決意して父を説き伏せる娘の偈を『テリーガーター』に取り入れていることから、女性の自己決定権を仏教教団は認めていたと結論づけた。

また悪魔の誘惑を撥ね除けたと語る比丘尼が多いが、悪魔は比丘尼に淫欲から興味をもつ男性ではないかと推測し、仏教教団にしかない比丘尼たちは男たちの興味を引く存在であったと推測した。

仏教比丘尼教団には、自身で生き方を見だし、それに向かって行動することができる比丘尼たちが存在していた。そのことが、彼女たちの偈集『テリーガーター』に伝えられている。彼女たちが比丘尼教団に身を置き、比丘たちと遜色なく解脱の道を求めることができたのは仏教教団に、比丘尼を受け入れる度量の広さがあったからである。当時の社会状況から鑑みると、女性の出家を快く思わない比丘もいたであろう。また布施に生活手段を依存する出家者にとっては在家の理解を得る必要もあったであろう。比丘尼に理解を示す仏陀や仏弟子たちが、これらの問題の対処に苦労したであろうことは推測できる。一步を踏み出した女性たちを後押しした比丘たちがいてこそ、比丘尼教団が成り立ったと結論付けた。

第二章 比丘尼を支えた比丘マハーカッサパ

マハーカッサパに関しては女性の出家に反対であったという文献と、女性の出家の良き理解者であったという文献の相反する二種のマハーカッサパ像が存在する。どちらが実像に近いかを検証した。頭陀第一のマハーカッサパはモッガッラーナが仏陀の後継者と言ったり、第二の仏と呼ばれた

り、また仏陀の信頼が厚い優れた出家者であったことを確認した。『テラガーター』の彼の偈から、ハンセン病の患者のちぎれた指の入った托鉢食を不浄感なく食し、供養を受ける相手を選び好みせず四依を守り、在家を思いやる優しい心の持ち主であることから女性を差別するような人物であったのかという疑問を呈した。戒律ではマハーカッサパは第一次結集のとき、女性の出家に尽力したアーナンダを責め懺悔させている。アーナンダが女性の出家を願っても、許可したのは仏陀である。マハーカッサパが女性の出家反対者なら、彼は仏陀在世の間は比丘尼について触れず、仏滅後弱い立場のアーナンダを責める狭量な人物となり、仏陀亡き後の教団を率いていくことができたかという疑問を呈した。

『アングッタラ・ニカーヤ注釈』や『テラガーター注釈』では女性の出家を拒まないマハーカッサパの姿勢が表されている。『仏本行集経』では女性の出家が認められたことを歓迎して、妻バッター・カピラーニーに仏教比丘尼になるよう勧めている。これによってマハーカッサパは男女平等思想の持ち主であることを指摘した。

マハーカッサパの女性観を窺える最も古い資料として、『テラガーター』の妻バッター・カピラーニーの偈を挙げた。そこには仏教出家者として生きる夫婦の息がぴったりあっていて、女性の良き理解者としてのマハーカッサパの姿が誦みこまれている。仏陀在世時代、夫婦で出家したのは仏陀とヤショーダラ妃・ウパカとチャーパー・マハーカッサパとバッター・カピラーニーの三組だけである。彼が女性の出家反対者であれば妻の出家を拒もうとした動きがあったはずであるが、それを示す文献はなかった。

仏教教団に女性差別が持ち込まれ比丘尼の存在が疎んじられると、マハーカッサパが仏陀は女性の出家を望まないのにアーナンダが無理強いしたと責めることで、仏陀は女性の出家を望まなかったし、仏陀の後継者のマハーカッサパも同じであったと創作されたと考えた。マハーカッサパのような優れた比丘が設立を認めていたから比丘尼教団が成り立ったと結論づけた。

第三章 パターチャーラー出家因縁譚の交錯と善業から悪業への展開

パターチャーラー比丘尼の出家因縁譚には仏教女性観の変化が窺える。パターチャーラーは持律第一位にあって抜きんでて多くの弟子を持ち精神的に活躍した人である。三十人の長老尼を指導し、チャンダーを出家させ、五百人の弟子に説法し、ウッターラーを教え諭している。この比丘尼は、比丘、比丘尼の偈集『テラガーター』『テラガーター』を通じて仏陀

に次いで多く名のあがる出家者である。彼女の出家因縁譚はキサーゴータミーやウッパラヴァンナーのそれと交錯しながら女性観を変えていく。『テーリーガーター』ではパターチャーラーは悟りの境地を静かに語っている。キサーゴータミーは世俗の貧しさ・寡婦・子を亡くす・親族が死に絶えるという惨めな境遇を語っている。ウッパラヴァンナーは母娘同婚の異常な結婚生活を語っている。しかしパーリ文献『アパダーナ』・『ダンマパダ注釈』・『テーリーガーター注釈』を検討した結果、まず三比丘尼の過去世における仏や僧伽への多大な供養が現世の出家と悟りに繋がるという共通性があった。出家動機はパターチャーラーの場合はキサーゴータミーの偈から創作したものを、キサーゴータミーは白辛子説話を、ウッパラヴァンナーは美しすぎて求婚者が多く困った父の勧めが出家の理由となっていて、彼女たちの偈と異なっていた。

漢文献ではより複雑に交錯していた。漢名微妙と呼ばれるパターチャーラーが『賢愚経』・『法苑珠林』・『諸経要集』ではパーリ文献とほとんど同じ出家動機ではあるが、出家に至るまでの苦を嫉妬による過去世の悪業のもたらす悪果として付け加えられていた。キサーゴータミーは漢名瘦瞿答彌とされ出家動機と過去世の悪業がパターチャーラーのものと似た内容であるが、亡くした子供たち・死んだ夫・死に絶えた親族の僧に対する過去世の悪業も加えられ、悪業のもたらす悪果の恐ろしさが強調されていた。ウッパラヴァンナーは漢名蓮華色で『四部律』『五部律』では彼女が偈で告白した母娘同婚の生活を下に作成されているが、『大方便佛報恩経』ではパターチャーラーの出家動機に似たものとなっていた。

この三比丘尼の交錯の原因を彼女たちの偈から探った。パターチャーラーという名は裸で歩き廻る女という意味で、衣服を着けていないことに気づかないほどの出来事が彼女の身に起こったと想像された。キサーゴータミーは当時のインド社会の女の悲しみをすべて背負わされているような境遇であった。ウッパラヴァンナーは妻としてあまりにも異常な経験をしている。三人は『テーリーガーター』の比丘尼の中でも取り分け辛い体験の持ち主という共通点があり、このような交錯の原因の一つと考えた。パーリ文献では過去世の仏と僧伽への供養を善業として強調していた。仏陀は一夫多妻の社会の女性を思いやっていたが、漢文献では当然そこに起こるだろう嫉妬を悪業と捉え女性の戒めとする仏教女性観に変化していったことが読み取れると結論づけた。

第四章 比丘尼差別の始まり

仏陀が女性を差別していたと見られる研究者も、男性と平等に見ていた

と主張される研究者もおられる。差別の根拠として挙げられる『スッタニパータ』の女性の体を不浄であるという偈は、淫欲の対象として見た時の女体を語ったもので、女性を差別したものではない。なぜなら人間の体そのものが不浄であると語る偈が『スッタニパータ』の他の偈にも、『テーラガーター』にもあり女性の体だけを不浄視しているという根拠を否定した。『テーラガーター』にも『テーリーガーター』にも比丘尼が比丘に諂ったり、比丘が比丘尼を見下した表現がなく、『雑阿含経』には男女共に悟れると記され、初期仏教の時代の仏教は男女平等であったと結論づけた。

しかし男性だけで構成された組織に女性が入ることにより起こる問題として、比丘尼の陵辱がある。『五分律』にウッパラヴァンナーがバラモンから受けた体験が、『根本説一切有部苾芻尼毘那耶』にバツダーがアジャセから受けた体験が語られている。比丘たちは修行の役に立つこともないこれらの問題の対処に大いに苦慮したであろうことは容易に推測でき、比丘尼の誕生が比丘に負担をかけたことも事実であると判断した。

比丘尼差別は八敬法から始まるがその制定の由来は、継母マハーパジャーパティーの出家の願いを仏陀は三度拒否するが、継母の恩を説くアーナンダの請願を受けて八敬法を条件に女性の出家を認めたとされている。しかし仏教出家者は世俗の絆を断っている。仏陀が俗世の恩に囚われ、継母マハーパジャーパティーを出家させることはありえない。次に、アーナンダはサーリプッタやモッガッラーナのような勝れた阿羅漢ではない。当時悟っていないアーナンダの説得に仏陀が屈するはずはない。また、仏陀は女性が出家したことで千年続く正法が、五百年に減少すると予言している。仏陀個人の恩のため、五百年間もの教えの維持を捨てたこともありえない。この三点から八敬法は仏陀の制定ではなく、後世創作されたと指摘した。

第五章 抑圧されていく人々

仏陀は人の貴賤を生まれによってではなく、行いによると説いた。その教えから仏教教団はシュードラや不可触民を受け入れた。『テーラガーター』『テーリーガーター』には合わせて四人ないし五人の不可触民出身者がいる。不浄をもたらすと接触を拒まれた不可触民を少数とはいえ受け入れて上位階級に交じり修行していたことを指摘した。

しかしヒンズー教的思想が浸透していくにつれて、仏陀の平等思想は部派仏教のころには徐々に差別思想へと変化した。仏陀の教えに反し説一切有部では不可触民の出家を禁止した。『根本説一切有部毘那耶雜事』では不可触民の出家禁止が記されている。出家主義に陥り在家の救済に関心を示さなかった部派仏教に対し、一切衆生の救済を目指した大乘仏教であ

ったが、そこにも不可触民を差別する傾向が現れる。サンスクリット『二万五千頌般若経』に、不可触民や障害者を貶める表現が存在する。『大品般若波羅蜜経』では深般若波羅蜜の教えを受け入れないという悪業の報いとして障害者や不可触民に生まれたとされていて、社会道徳的悪業より宗教的悪業を重視し、『大智度論』も同様であることを指摘した。

不可触民を排除する動きが現れたように、女性に対しては、仏陀が制定したとは考えられない、ハラスメント以外のなにものでもない律が存在する。『パーリ律』と『根本説一切有部毘那耶雜事』の比丘尼韃度に医学的にありえない女根に関する卑猥で下品な遮法がある。比丘尼になるには比丘と比丘尼の両教団で具足戒を受けねばならない。比丘尼を貶める目的か、比丘尼を排除する目的で作成した遮法であると結論付けた。『根本説一切有部毘那耶雜事』で、不可触民の出家の禁止とともに、女性の出家にも不必要と思われる女性差別が連動して取り入れられていて、不可触民と女性の差別は切り離すことのできないものであることの証と結論付けた。

第六章 五障三従と変成男子

仏教教団は比丘尼だけでなく、一般女性も男性と比べて劣っていて悪性を持つものと考えようになったことを『増壹阿含経』から指摘した。部派仏教のころ『マヌ法典』の三従思想が取り入れられた。インドと中国の三従思想を対比し、インド女性の置かれた立場がいかに過酷であったかを指摘した。ついで五障説が説かれたが、ある部派で比丘尼が差別されると、他部派でも我先にと取り入れだし、より強烈な差別経典が創作されていったと捉えた。女性差別が仏教界に蔓延ると、大乘仏教は空思想から女性を含む一切衆生の救済を説いた。一切が空であるから男女の区別も空であり、男性だけが成仏でき女性はできないことはないと言男女の平等を主張した。『維摩詰所説経』や『勝鬘師子吼一乘大方便廣経』が男女平等を説いたが、五障説を教団から排除することはできず定着していった。

それに対して五障のある女性の成仏を希求する動きが現れた。女性が男性に性転換して成仏する変成男子説の誕生である。多数の経典で説かれているが『法華経』を取り上げて考証した。龍女は、女性である・八歳である・畜生であると男性出家者に比べ、三点で劣っている。弱者救済の意思の表れである。変成男子が女性差別であるかと問われれば、女性が男性に変身しなければ救われないなど差別思想以外のなにものでもない。しかしこの説が生まれた時代の人々の女性観を鑑みると、現代感覚で正否を判定することはできない。当時の社会環境においては、女性のまま救われることが受け入れ難かったゆえ、変成男子が説かれたのであった。変成男子

説が女性に対し悪意で創作されたとはいえず、仏教教団を取り巻く社会意識の中では精一杯の救済法であったと結論付けた。

第七章 鎌倉仏教における女性の解放

平安時代の仏教二大勢力、天台・真言の二宗は比叡山・高野山の靈山に、女人禁制を布いた。鎌倉新仏教ではこれまでの女性観に疑問を抱いたり、批判したりする女人救済論が次々に誕生した。法然は最初に結界に触れた人である。比叡山・高野山の女人禁制を批判し、変成男子説に疑いを呈し、旧仏教とは異なった新しい見方で女人往生を説いた。『無量寿経釈』で、法然は第十八願に女性も含まれ、基本的には男女同様に救われるが、女性は障りが多いゆえに、往生できることを信じられない。つまり女性を安心させるのが第三十五願である。また結界が女性を拒否することも第三十五願の必要性であると説いた。『百四十五箇条問答』で、女性の生理と出産時の産血が一般に穢れとされることについて仏教では問題はないと説いた。遊女など社会的立場にかかわらず、全ての女性に往生の道を示した女性救済の先駆者であった。後、道元・日蓮と続く日本仏教における女性解放の道を付けた人であったと結論付けた。

女人禁制に対して論理的に厳しく異を唱えたのが道元であった。その著『正法眼蔵』の「礼拝得髓」において、比丘尼が不浄な存在ではなく、比丘にも劣ることがないという意見を展開し、結界を非難した。日本・中国に過去尊敬された女性がいて、仏陀在世の僧伽では比丘尼も四果を得たことを述べた。仏教の知識があり修行もしている比丘尼と、知識も少なく修行もしていない一般男性を比較し、仏弟子の二位である比丘尼が、田夫や野人の入れる所に入れられないという矛盾を指摘した。しかし道元の女性観は大きく変貌する。『正法眼蔵』「出家功德」では女人成仏を否定している。曹洞宗内でも「礼拝得髓」と「出家功德」の女性観の不一致について統一された見解はないようである。「礼拝得髓」は深草で「出家功德」は越前で執筆された。各地域の女性観の影響ではないかと推測した。

念仏無間・禅天魔・真言亡国・律国賊と日蓮は新旧全ての仏教を否定し、「南無妙法蓮華経」の題目のみが救いであると主張した。「法華経」以外の経典が女性を貶め、五障三従など女性の成仏を妨げていることを批判した。『女人往生鈔』で弥陀の本願では末法の女性を救えない、女人往生を可能にするのは「法華経」であると主張した。「法華経提婆達多品」には龍女の変成男子があるが、それを認めず、女身のままの成仏を主張した。女性の生理について、『月水御書』では人の身体より出る屎尿も清潔にしていれば差し支えないように、生理も同じであるから、忌み嫌う必要はな

いと論理的に生理の不浄を否定した。これらのことから鎌倉新仏教の女性救済は日蓮をもって完成したと結論付けた。

終章

ディオドロスの『歴史叢書』のサティールとメガステネスの『インド誌』の仏教比丘尼を比較し、女性の地位が極端に低いインド古代社会で仏教教団では男女が平等に修行に励んでいたことを指摘した。

女性差別と女性救済を繰り返してきた仏教であるが、女性差別を導入したのは明らかに男性出家者である。また女性の救済に力を尽くしたのも男性出家者である。女性差別を実行した男性出家者たちは自己の主張を正当化するため、女性出家者が平等に扱われた時代の文献を削除しようとはしなかった。自己の都合に合わせて文献を削ったり変えたりすることはせず、ただ差別的文献を加えるだけの道を選んだ。これが過去の文献をもとに後世一度排除された女性の救済を模索することに繋がったと指摘した。日本に仏教が入った当初から女性を差別していた経典の数ある中で、鎌倉仏教が女性救済を導き出すことのできた要因でもあると結論付けた。

仏教の差別思想を取り上げて男性出家者を差別者として非難することは簡単である。女性に対する悪意や偏見から女性差別に荷担した男性出家者もいたであろう。時代の風潮にやむなく迎合していった男性出家者もいたであろう。もし仏教がインド古代社会で女性差別を拒否し続けていたならば仏教は存続していたであろうか。経や律の文字化以前に消滅して仏陀の目指したことは残らなかった可能性もある。仏教女性観の展開を鑑みると、仏教は節操のない思想ともとれるし、柔軟な思想ともとれる。時代にあわせ変化することをやむなくされたゆえ、時代に合わせることができる思想である。膨大な文献には現代にも通用する女性観が多々あり、仏陀の時代近くに戻るだけで現代社会に適合する思想であると結論づけた。